

令和5年度 石川県立盲学校 自己評価計画 中間評価

重点目標	具体的取組	担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析および今後の取り組み
1 授業実践力の向上	主体的・対話的で深い学びの視点から教科指導の充実を図る。	全学部 教務課	【努力指標】 教員間で授業を参観し合い、授業改善の視点を持つことに取り組む。	自分の授業を2回以上参観してもらい、授業改善に活かした教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	D (18%)	自分の授業を1回以上参観してもらった教員の割合は64%である。その内、参観者の意見を授業改善に活かした教員の割合は93%であり、授業参観が授業改善に活かされていると言える。達成度は低いが、各教員が計画的に取り組んでいる。
2 専門性の向上とセンター的機能の充実	教職員一人一人が、視覚障害教育における自己の専門性の向上を目指し、校内での研修を受けるとともに、外部の研修に参加する。	全学部	【努力指標】 各自が視覚障害教育に関する校内研修のほか、外部研修への参加に取り組む。	年間をとおして、外部研修（オンライン等を含む）を2回以上受講した教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C (62%)	2回以上の研修を受講した教員は62%であった。夏季休業中に、オンラインで研究会の分科会に参加した教員が多い。他校の実践報告や大学教授等の助言の視聴を、指導に活かすことができる。今後もオンライン研修を活用していく。
	外部支援担当者会で、専門相談員派遣や教育相談のケースを事例として検討会をもち、相談担当者の専門性の向上及び相談・支援の充実を図る。	支援課	【成果指標】 事例検討会や自主研修会を実施し、多様なケースの検討を行うことにより相談・支援に関する専門性が向上する。	事例検討会を通して、専門性が向上したと回答した外部支援担当教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B (75%)	事例検討会実施後にアンケートを行っている。各担当者が、相談支援に関して課題と感じていることについて、外部講師から示される観点を元に考え、自身の理解が深まっていることを感じている。外部講師を招いた担当者会を継続していく。
3 キャリア教育の推進	学部集会や交流学习等（オンライン交流を含む）で、児童同士が話し合う場を設け、コミュニケーション力の育成に取り組む。	小学部	【努力目標】 他の児童と話し合う場を設定し、お互いの考えを伝え合う機会をつくる。	児童が考えを伝え合う場面がある交流学习（オンライン交流を含む）を年間6回以上実施した児童の人数が A 3人 B 2人 C 1人 D 0人	—	年度当初はクラスづくりの期間のため、評価は後期のみとする。6月より学部集会で児童が考えを伝え合う場を設定している。また、7月より交流授業等の計画的な実施に取り組み始めた。今後、計画的に取り組んでいく。
	生徒一人一人が持つコミュニケーションに関する課題を理療科全体で共有し、授業や学校生活を通してその課題改善に取り組む。	理療科	【満足度指標】一人一人の課題を掲げたチェックリストを用いて、生徒が自らの課題を改善できたと感じる。	生徒個々の目標に対して、生徒自身が授業等を通して課題を改善できたと感じる項目の割合が A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満	C (50%)	生徒が自らの課題を5項目ずつ掲げ、理療科全体で共有し、挨拶や会話等、患者とのコミュニケーションを想定した指導を行った。その結果、約半分の項目を改善できたと生徒は感じている。今後は臨床実習等、様々な場面で残る課題の改善に取り組む。
	自分の将来像のイメージが持てるような、進路に関する授業を行っていく中で、働く力の育成を図る。	進路課 中学部 普通科	【満足度指標】 進路について、授業や進路行事を通して、生徒が将来像をイメージできたと感じる。	進路に関する授業や行事が自分の将来像を考えると、参考になったと感じる生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	A (91%)	「参考になった」と回答した生徒は、11名中10名であった（無回答1名）。進路行事では、1回の中で発達段階や障害の程度に応じた内容を複数企画したことがよかったと考えられる。今後も、生徒が将来像をイメージできるような進路学習を企画していく。
	自らの生活上の課題に気づき、適切に目標を定め、必要な支援を受けながら解決を目指す課題解決能力の育成を目指す。	寄宿舎	【満足度指標】 生徒が、自らの課題に気づき、実践を通して解決する力が身についたと感じる。	進路に関する授業や行事を通して、生徒が自分の将来像をイメージできるようになったと感じる保護者の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	A (90%)	生徒が将来像をイメージできるようになったと感じる保護者は、10名中9名であった。進学や就労など多様なニーズに応じた内容を企画し、保護者の参加率も高かった。今後も、進路学習での生徒の変容を保護者に伝えていくよう、取り組みを継続していく。
				自分の課題から目標を設定し、解決のために継続して取り組むことができたと感じた生徒の人数が A 4人 B 3人 C 2人 D 1人以下	A (4人)	舎生と担当者が個別に話し合っ目標を設定したことにより、舎生自身が目標を意識して、課題解決に向けて取り組めたとの自己評価につながった。今後も、必要に応じて目標を再設定しながら取り組みを継続していく。
				課題解決にむけて目標を設定して取り組んだ結果、変容が見られたとする保護者の人数が A 3人 B 2人 C 1人 D 0人	A (3人)	保護者アンケートの中で、舎生から取り組みについて話を聞き、評価することができたと回答があった。今後も舎生の様子や変容が保護者に伝わるよう取り組みを継続していく。
4 校務分掌等の業務改善	各課が、マニュアルをもとに、業務の効率化や平準化を目指して業務を遂行する。	全学部	【成果指標】 各課のマニュアルやスケジュールをもとに、効率化や平準化を意識して業務を行う。	各課のマニュアルやスケジュールをもとに業務の効率化や平準化を意識して業務を行った教員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B (74%)	マニュアル等をもとに業務を行い、効率化を意識できた教職員は74%であった。マニュアルや過去の資料をもとに、今年度の計画を立てることができ、効率化につながった反面、進路関係業務など、児童生徒の状況によってマニュアルが活用できず、効率化につながらないこともあった。